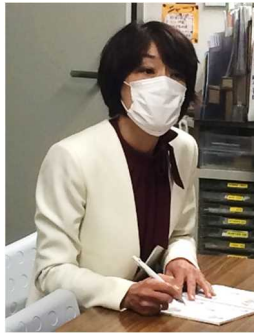




# 新春対談

—非正規での経験が原点—  
参議院議員立候補予定者 古賀ちかげさん



\*今年の新春対談は、二〇二二年七月に行われる予定の第二十六回参議院議員選挙比例代表の日政連議員候補予定者「古賀ちかげ」さんに小鍛冶執行委員長が国政に立候補する決意をされた原点についてお話を伺いました。

## 非正規の立場で考えたこと

**小鍛冶**—きょうと教組でも年々非正規の組合加入者が増えてきています。SOSをきょうと教組に求め、そこから組合加入につながるケースが続いています。古賀さんは長年非正規の立場で現場で奮闘されてきたと聞きました。

**古賀**—現場三十年の経験のうち、二十年を臨時採用教職員として勤務しました。採用された当初は自分の立場をさほど意識することはありませんでした。しかし、二十歳を超えた頃から感じるようになってきました。賃金が

これ以上あがらなくなりました。職員室に居場所がないと感じることがありました。そして、三月末から四月初めに任用が切れることで、担任や校務分掌の決定の場に自分たちの意見を反映させる機会を奪われてきました。そして、その間は保険が切れ、しかも将来的に年金にも影響することがわかってきました。また、他県で経験のある正規採用の教職員は面接だけで地元採用されますが、臨時教職員はどれだけ地元で豊富な経験を積み重ねてきてもそんな優遇はありません。

しかし、理不尽さを感じながらも、採用試験に受かってない自分が悪いと思っていました。

## つながれたからこそ

### 変わった

**古賀**—そんなとき、福岡県教職員組合から臨時の方の話を聞かせてほしいと声がかかり、そこで自分以外の臨時教職員の方の話を聞く機会ができました。一人ひとりの違う生活を抱えている中で「臨時教職員」だからこそ背負わされている課題、問題に気づかれました。それをきっかけに、自分たちの立場の問題を何とかしたいと臨時部を立ち上げました。五人からのスタートでした。

まず、臨時教職員の声をできるだけ聞きたいと、アンケートを実施すると、予想以上の回答が返ってきました。労働条件、雇用の不安、なんとなく感じる威圧的な空気など、職場では出せない溢れんばかりのひとりの思いがそこにありました。なんとかしたいということと活動に取り組み中、自分自身も声をあげていくことができるよう

になりました。組合の大事さを身をもって感じることでできました。

**小鍛冶**—きょうと教組には、多くの臨時教職員が所属しています。正規の教職員が気づいていない非正規の問題を、実際に話を聞くことで気づかされたことがたくさんあります。非正規教職員の待遇改善はきょうと教組の取り組みの柱となる活動です。「空の一日」が神奈川に次いで全国で二番目に解消したことは取り組みの大きな成果だと思っています。以前、古賀さんが「私は組合員になれませんでした」と話されていたのを聞いて、非正規教職員が組織対象ではなかったときがあったことに驚かされた記憶があります。

**古賀**—臨時部ができて、臨時者同士がつながることができ仲間ができたことは大きなことでした。そして、私たちのことを周りの人が知ってくれることだけでも心の軽さが変わりました。私たちの勤務条件に関して職場で管理職からの説明もありません。雇われている状態だったので、正規教職員と同等の働き方を職場で求められていました。正規採用になったとき、臨時の時と同様の仕事だったのに月例給が一万円上がりその差額に愕然としました。正規教職員と同じ仕事で、しかも年度末には毎年不安な状態に置かれます。臨時部が無かったときは、年度末に次の勤務の依頼が来るかどうか不安を抱えて一人で待っていました。組合加入できてからは、組合仲間が力になってくれました。一人では非力でしたが、組合で取り組んでくださ

るの、心強かったです。

**小鍛冶**—非正規や再任用の教職員の労働条件については、もちろん組合でも問題意識をもって取り組んでいます。改善に向けて今後一層取り組みが必要であると認識しています。

## 立候補決意への原動力は

**小鍛冶**—今回参議院議員に立候補する決意をされた大きな理由は何だったのでしょうか？

**古賀**—やはり、自分自身が臨時の立場で勤務していたことが大きいです。特にこの「コロナ禍では非正規で働く人たちに大きなしわ寄せがきています。深刻な問題だと受け止めています。また、自分自身臨時の間、胸をはって働いていませんでした。人間としての価値が低いように思わされていたのだと思います。「人」ではなく、「制度」「仕組み」の問題なのです。そこをなんとかしたいというのが立候補への原動力の一つです。

もう一つは、学校現場の今の状況をなんとかしたいという思いです。三十年の現場経験の中で、子どもたちが、そして教職員が苦しんでいる渦中で私も、もがいてきました。しかもその状況は年々厳しくなってきました。学校現場の声を政治の場に届けることで、今の学校の状態を少しでも改善し子どもたちが安心して、少しでも輝ける場所にしたいと願っています。

**小鍛冶**—国で法律が変わらない限りどうにもできない現場の問題があります。今回、もちろんまだまだ不十分ではありますが、四〇年ぶりに小学校

の学級編制基準が一律三十五人に引き下げられることになりました。また、昨年の給特法の改正の時も、願った通りの実現には至りませんでした。付帯決議により、非常に厳しい条件が課されました。これにより、教育委員会との交渉の際にも私たちにとって心強い武器になっていきます。日政連議員のみなさんの活躍の大切さを、感じています。

**古賀**—学校現場の厳しい現実を想像できない国会議員が非常に多い中、少しでも生々しい学校現場の現実を国会に届けることが重要です。そのことを抜きにして、政治の場で教育の問題は議論できないと感じています。

**小鍛冶**—今現場は、超勤実態が解消されませんが、「コロナ禍での厳しい現実の中、日々奮闘しています。そして子どもたちはさまざまな厳しい問題に直面しています。そんな現場での生の声が、直接政治の場に届くことが、不可欠だとこの間感じてきています。長年現場に軸足を置いてこられた古賀さんに学校現場の声を国政の場に届けていただけるようになることを強く願っています。

